

Editor's eye

・特集・

メラノーマ診療Up-To-Date

編集担当 馬場 直子

かつてメラノーマは皮膚科領域の中でもっとも完治がむずかしい悪性腫瘍として恐れられていた。しかし近年、分子生物学の目覚ましい進歩の成果として、変異BRAFに対する分子標的薬と、PD-1やCTLA-4に対する免疫チェックポイント阻害薬が開発され、進行期メラノーマ治療にパラダイムシフトがもたらされた。本特集号ではメラノーマ治療の進歩と現状、今後の課題について理解を深めたいとの思いで企画した。

まず冒頭の「展望」では、竹之内辰也先生にメラノーマの周術期補助療法の変遷や現状、さらに今後の展望について書いていただいた。現在の術後補助療法は抗PD-1抗体のニボルマブまたはペムブロリズマブ、抗CTLA-4抗体のイピリムマブなどの免疫チェックポイント阻害薬、またBRAF阻害薬のダブラフェニブとMEK阻害薬のトラメチニブの併用が主に使われているが、それぞれの治療薬の特性、選択基準、課題などをまとめていただいた。今後は新たな治療戦略として術前補助療法が検討されておりさらなる予後の改善が期待されているという、明るい展望も述べられている。「臨床研究 1」の古賀弘志先生は、メラノーマ初期病変の診断の重要性を述べ、ダーモスコピー所見における7つのチェックリストをわかりやすい写真と解説付きで説明されている。「臨床研究 2」の肥田時征先生は、標準治療の終了した固形癌患者が保険診療で受けられる遺伝子パネル検査5種類について特性や適応を紹介し、メラノーマ治療における活用法と有用性についてわかりやすく解説されていて、今後の癌治療の個別医療の展開に期待がもたれる。「治療」の藤村卓先生からは本邦におけるメラノーマの術後補助療法は、人種間のサブタイプの違いから海外の臨床成績とは異なるため、本邦でのメラノーマの治療戦略を考えるうえで遺伝的背景による治療効果の予測が重要であるというメッセージをいただいた。

「臨床例」では、進行期メラノーマや再発・転移性メラノーマで免疫チェックポイント阻害薬や分子標的薬が奏効しなかった症例に対して、従来の奏効率の低かったダカルバジンを用いたりインターフェロンβとイミキモドの局所療法を併用することで著効したという貴重な報告が2例あった。そのほか新規治療薬が奏効し長期寛解が得られたという2例、一方で治療後も転移、再発がみられた例や、治療の副作用で苦慮した例もそれぞれ2例載せてある。部位別では、爪、足底、粘膜のメラノーマの例をそれぞれ採り上げたので、部位による臨床像や治療に対する反応性の違いなどを感じていただきたい。特殊なものとして妊婦に生じたメラノーマの壮絶な治療例、まれなspindle cell melanomaの例もあるのでご一読いただきたい。

本特集号を読んで、日常診療の中でメラノーマを早期診断する目に磨きをかけ、治療に関する知識のアップデートをしていただければ幸いである。